

中国語における「晋方言」の イエス・ノー疑問文の構文パターンについて

張 麟声

1 はじめに

Lindsay J. Whaley(1997)では、言語類型論の立場から、イエス・ノー疑問文における3種類の構文パターンが述べられている。3種類とは、それぞれ①倒置型(inversion)、②疑問小辞型(question particle)、③動詞接辞型(verbal affixation)のことである。倒置型(inversion)は、すこし耳慣れない言葉だが、英語の *Would you care to dancer?* のように、平叙文における助動詞などを文頭に移動させて作るイエス・ノー疑問文のことである。

この3タイプの性格について、Lindsay J. Whaley(1997)に明確な言及はない。それに対して、言語の類型的特徴をとらえるための対照研究という立場に立つ筆者は、①倒置型(inversion)、②疑問小辞型(question particle)、③動詞接辞型(verbal affixation)という3タイプは、それぞれ屈折語、膠着語、抱合語によく見られるパターンであり、孤立語におけるイエス・ノー疑問文の典型的な構文パターンは、その3タイプのいずれにも属さない「正反型」だと主張している。言い換えれば、イエス・ノー疑問文において正反型という構文パターンを用いることが、孤立語の「類型的特徴」の一つであると考えるのである¹。

ここに言う正反型とは、次の例(1)のように、「述語フレーズ+否定辞」か、また、例(2)のように、「述語フレーズ+否定辞+述語フレーズ」という構造を取る構文のことである。

(1) 你 吃 羊肉 不?

あなた 食べる 羊の肉 ない

(2) 你 吃 羊肉 不 吃?

あなた 食べる 羊の肉 ない 食べる

この「イエス・ノー疑問文において正反型という構文パターンを用いることが、孤立語の「類型的特徴」の一つである」という主張については、張(2015)において一度中国東南部6方言に関する先行研究を引用して論証している。そして、その張(2015)に続いて、中国の北方の晋方言のデータを用いて改めて検証、増強していくのが本稿の狙いである。

ちなみに、ここに言う「述語フレーズ+否定辞」、「述語フレーズ+否定辞+述語フレーズ」における「述語フレーズ」には、動詞述語に限らず、形容詞述語も名詞述語も含まれる。それゆえに「述語フレーズ」と名付けたわけだが、一方、表現の簡潔さを考える必要があ

¹ この主張を最初に示したのは、2014年4月19日(土)に大阪大学豊中キャンパスで催された土曜ことばの会において、「「正否質問型言語」から「質問マーカー型言語」へ—言語接触による言語変化の角度から—」というタイトルで口頭発表した際であり、その際の「正否質問型」を現在では「正反型」と呼んでいる。なお、この口頭発表を以下で言及する場合、張(2014a)とする。

るため、以下、郭校珍(2008)などの先行研究に倣い、「述語フレーズ」と否定辞をそれぞれ VP 及び Neg と表記し、「述語フレーズ+否定辞」、「述語フレーズ+否定辞+述語フレーズ」のことを「VP + Neg」、「VP + Neg + VP」と表記する。

2 中国の方言事情の概略及び本研究で用いる「晋語」のデータ

中国の方言区分に関しては、「北方方言、吳方言、閩方言、粵方言、客家方言、贛方言、湘方言」という7区分説と、これに「徽語、晋語、平話」の三つを加えた10区分説の2種類が有力である。

7区分説は、袁家驊編(1960)『汉语方言概要』における「北方方言、吳方言、湘方言、贛方言、客家方言、粵方言、閩南方言、閩北方言」の8方言を、同第二版である袁家驊編(1983)において、「閩南方言、閩北方言」に分けられていた「閩方言」が一つにまとめなおされて成立した学説である。7区分のうち、「北方方言」を除く「吳方言、湘方言、贛方言、客家方言、粵方言、閩方言」の6方言は、江蘇省、浙江省、福建省、江西省、湖南省、広東省、広西チワン族自治区、海南省など中国の東南地域で話される。「張(2015)においてすでに一度中国東南部6方言に関する先行研究を引用して論証しており」という第1節の叙述における「中国東南部6方言」は、即ちこの6方言のことを指す。

一方、この7区分説に対する10区分説とは、大ざっぱに言って、7区分説の「北方方言」を「官話区、晋語区」の2つに分け、「吳方言」の一部を「徽語区」として独立させ、さらに、北方方言と粵方言とが重なって話される広西チワン族自治区の一部に「平話区」を設け、その結果、7区分を「官話区、晋語区、吳語区、徽語区、贛語区、湘語区、閩語区、粵語区、平話区、客家話区」の10区分に増やしたものである。その初出は、中国社会科学院・澳大利ヤ人文科学院合作編纂(1988)『中国語言地圖集』であり、以下に引用するその地圖集の地圖の一つであるA2がこの10区分を示している。なお、この説の提唱者は、当時中国社会科学院語言研究所の所長を務める李榮であり、このような区分を立てる根拠は、主に音韻的なものだという。



図 A2: 「中国汉语方言图」

(中国社会科学院・澳大利亚人文科学院合作编纂 1988: A2, 一部方言境界を加筆)

なお、見づらいため、色凡例のみ下記に改めて示す。

1 东北官话	晋语	闽语
2 冀鲁官话	赣语	
3 胶辽官话	徽语	
4 北京官话	吴语	
5 中原官话	湘语	
6 兰银官话	客家语	
7 西南官话	粤语	
8 江淮官话	平语	

7 区分説では、共通語である北京語を含む中国の北の地域の「北方方言」である 1 つに対して、東南地域の非「北方方言」は、6 方言に分けられる。これに対して、10 区分説では、東南地域の非北方 6 方言が 8 方言となり、北の地域の方言は、北京語を含む「官话区」とそれに並ぶ「晋语区」の 2 つに分けられたことになる。この 10 区分説に見られる「官

話区」、「晋語区」2分説を踏まえ、「晋語区」の方言のイエス・ノー疑問文について考察し、北京語と違って、「吗」のような疑問小辞を持たずに、正反型が用いられていることを指摘し、もって、筆者の仮説を増強していくのが、本稿の目的である。

「晋語区」の「晋」は山西省の略称であるが、方言区画としての「晋語区」が行政区画としての山西省＝「晋」と同一ではない。「晋語区」の中心地域が、山西省即ち「晋」にあるゆえに、「晋語区」と命名されたが、両者は完全に重なるものではない。山西省は、北から数えて「大同市、朔州市、忻州市、陽泉市、太原市、吕梁市、晋中市、長治市、臨汾市、晋城市、運城市」という11市からなり、次の『中国語言地圖集』の地図の一つであるB7から分かるように、そのうちの9市が「晋語区」であり、西南部に位置する臨汾市と運城市の2市はそうではない。一方、山西省の西の陝西省、北の内モンゴル自治区、東の河北省、南の河南省のそれぞれの一部が「晋語区」である。つまり、「晋語区」は山西省を中心に、5つの省、自治区²にまたがって話される方言区画のことである。

² 中国では、「省」と同格の少数民族の居住地域を「自治区」と呼ぶ。

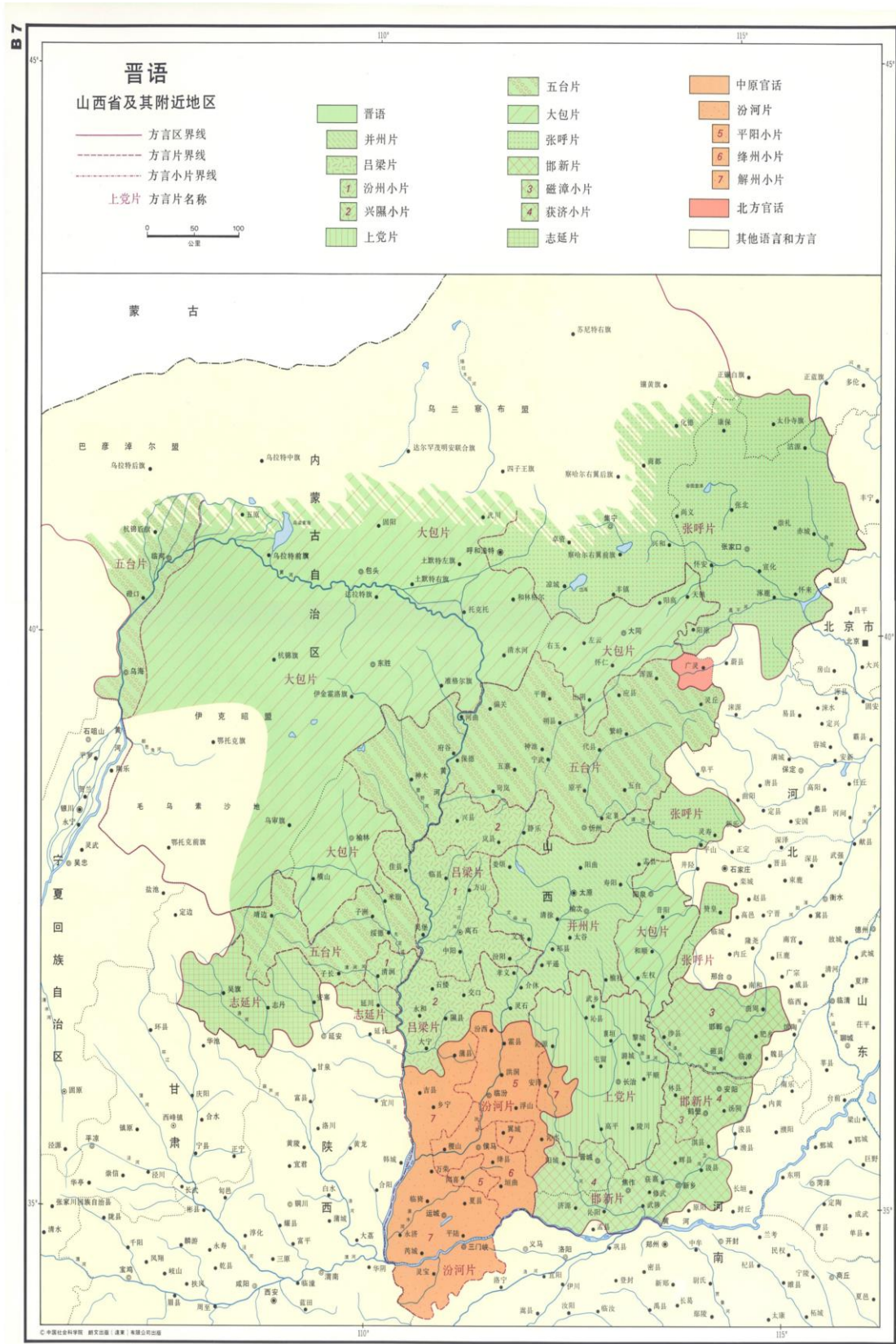


图 B7: 「晋语区」

中国社会科学院·澳大利亚人文科学院合作编纂 (1988: B7)

この「晋語区」のイエス・ノー疑問文の構文パターンを考察していくのに際して、主に論拠として使うのは、以下4点の先行研究、及び筆者自身が調査を行って入手したデータである。

邢向东・張永勝著(1997)『内蒙古西部方言语法』内蒙古人民出版社

邢向东(2006)『陕北晋語语法比较研究』商务印书馆

邵敬敏・王鵬翔(2010)「陕北方言的正反是非问句」(邵敬敏等著(2010))

郭校珍(2008)『山西晋語语法专题研究』华东师范大学出版社

邢向东・張永勝著(1997)、邢向东(2006)及び邵敬敏・王鵬翔(2010)の3点は、書名や論文名が示す通り、内モンゴル自治区の西部地域の「晋語」及び陝西省の「晋語」の記述である。一方、4番目の郭校珍(2008)は、その書名の通り、山西省の「晋語」における文法現象の一部を対象とした研究であり、疑問表現がその論考のポイントの一つとなっている。もっとも、筆者とは問題意識が異なるために、筆者が必要とするデータをこの郭校珍(2008)では十分に提供できていない。ゆえに、筆者が山西省の「晋語」の一部を自分の手で調査することにしたのである。

筆者の調査は、先行研究を補う形で行った。まず、内モンゴル自治区の西部地域の「晋語」を取り扱った邢向东・張永勝著(1997)に対して、内モンゴル自治区の東部地域と考えられるウランチャブ市の「晋語」を調査した。ウランチャブ市の「晋語」は「晋語」の「張呼片(張呼区域)」になる。

また、邢向东(2006)及び邵敬敏・王鵬翔(2010)が陝西省の「晋語」を研究したのに対して、山西省の「晋語」における「并州片(並州区域)」と「五台片(五台区域)」について調査を行った。「并州片(並州区域)」は、「晋語区」中心都市である太原市が位置する地域であり、共通語である北京語の影響を一番強く被っていると考えられるだけに、その変容のあり方の現状を知りたいからである。「五台片(五台区域)」は「并州片(並州区域)」のすぐ北に位置し、この「五台片(五台区域)」を調査すれば、山西省の北部及び内モンゴル自治区の「晋語」のデータを一応完全な形で入手できたことになると考えたからである。なぜなら、上に引用している地図 B7 から分かるように、「五台片(五台区域)」と「張呼片(張呼区域)」との間に「大包片(大包区域)」というのがあるが、その「大包片(大包区域)」には、山西省の「晋語」も少し含まれているものの、その大部分が、邢向东・張永勝(1997)が取り扱った内モンゴル自治区の西部の「晋語」にあたるので、邢向东・張永勝(1997)のデータで補完できるからである。

ちなみに、「張呼片(張呼区域)」、「五台片(五台区域)」、「并州片(並州区域)」3地域の調査に際して、調査地点として、それぞれウランチャブ市、代県、太原市の3カ所を選んだが、曹志耘主编(2008)『汉语方言地图集 语法篇』を参考してのことである。曹志耘主编(2008)『汉语方言地图集 语法篇』において、この3カ所が調査地点となっているからで

ある。

3 考察

具体的な論証に先立って、本研究の結論、言い換えれば主張を以下 3 点示しておく。

- (1) 少なくとも「晋语区」の主要部の「晋语」においては、イエス・ノー疑問文の構文パターンとして、「吗」のような疑問小辞ではなく、「正反型」が用いられる。
- (2) 少なくとも「晋语」においては、「正反型」の「VP+Neg」は、「VP+Neg+VP」の省略形とは言えず、むしろ「VP+Neg」のほうがより典型的なものである。
- (3) 「正反型」の「VP+Neg」における Neg が文法化して疑問小辞になるには、「正反型」では一部の疑問表現が成り立ちにくいという構文的理由がある。

以下、この 3 点をそれぞれ 3-1、3-2、3-3 において検討する。

3-1 「晋语区」の主要部の「晋语」においては、「正反型」が用いられる

ここでは、少なくとも「晋语区」の主要部の「晋语」においては、「吗」のような疑問小辞ではなく、「正反型」というパターンが用いられるということを検証していく。「少なくとも「晋语」の主要部」とわざと断った理由は、「晋语」は東、南、西の 3 方角において「官话区」³に囲まれ、とりわけ河北省の「晋语」の一部は「官话区」の中核地域である「北京官话」と隣接しているため、「北京官话」に浸食されて、「吗」を使っていないとも限らないからである。

言うまでもなく、ここに言う「晋语区」の主要部は、上に言及した先行研究が取り扱った、及び筆者が調査した内モンゴル自治区、陝西省及び山西省の「晋语」のことである。まず内モンゴル自治区の西部の「晋语」に関しては、邢向东・张永胜著(1997)で次のように述べられている。

西部方言没有专表是非问的语气词，完全靠上升语调来表示是非问

(西部方言には、イエス・ノー疑問を表わす専用の小辞がなく、イエス・ノー疑問はもっぱら上昇型イントネーションによって表される)。

(pp.200)

由于，没有是非问语气词，西部方言将“不”和“没”置于句末的反复问句特别发达

(イエス・ノー疑問を表わす専用のマーカがないために、西部方言では、“不(ない)”と“没(なかった)”を文末におく正反型がたいへん発達している)。

(pp.201)

³ 中国の北部の二つの方言の中の一つとして、「晋语区」と並ぶ「官话区」は、さらに「东北官话」、「北京官话」、「冀鲁官话」、「胶辽官话」、「中原官话」、「兰银官话」、「江淮官话」「西南官话」という八つの区域に分けられている。「晋语」は、東は「北京官话」と「冀鲁官话」、南から西にかけては「中原官话」、それから、西のもう一部は「兰银官话」というように、四つの「官话」区域に隣接している。

また、陝西省の「晋語」については、邢向东(2006)では、

在陕北晋语中，由于没有专表是非问的语气词，因此是非问句并不发达。与此相应的是，反复问句特别常用

(陝西省北部の「晋語」では、イエス・ノー疑問を表わす専用のマーカーがないために、イエス・ノー疑問が発達していない。その代わりに、反復疑問形式がよく用いられる)。

(pp.241)

と述べられ、それに加えて、邵敬敏・王鵬翔(2010)では、次のように述べられている。

陕北方言属于北方方言区，它的疑问句系统跟普通话基本一样，也可以分为是非问句、特指问句和选择问句三种结构类型，但我们通过比较，发现普通话的是非问句通常有两种格式：①句子结构跟陈述句相同，单纯依赖上扬语调来表达疑问；②句末用疑问语气词“吗”或“吧”来表示疑问。而陕北方言好像只有跟普通话第一种格式相当的是非问句，如“今天是二月二？”，却没有第二种利用疑问语气词的是非问句。然而有趣的是，口语中大量出现另外一种疑问句格式，它既像正反问，又像是非问，或者说，形式上类似于正反问句，只是正反问句的否定部分省去否定词后面的成分，只剩下一个“不[pə? ʒ]”或“没 [mə? ʒ]”，如“今天是二月二不？”，而且这一种格式比只靠语调来承担疑问信息的是非问使用频率更高。

(陝西省北部の「晋語」は、北方方言区域に属し、その疑問文の体系は共通語である北京語と同じく、イエス・ノー疑問文、疑問詞疑問文及び選択疑問文に分けることができる。だが、両者を比較してみると、北京語には①文の構造は平叙文と同じで、疑問という機能をもっぱら上昇イントネーションによって表わす；②文末に疑問小辞である“吗”あるいは“吧”が用いられる、という2つの形式が存在するが、陝西省北部の「晋語」には、“今天是二月二(今日は二月二日)？”のように、北京語の①に相当するパターンしかなく、北京語の②の疑問小辞を用いるパターンはないことが分かる。その代わりに、面白いことに、話し言葉ではまったく違う疑問パターンが用いられる。このパターンは、正反疑問文ともイエス・ノー疑問とも似ていて、正確に言うと、形式上は正反疑問文で、ただ、“今天是二月二不(今日は二月二日ですか)？”のように、「VP+Neg+VP」という正反疑問文の Neg の後ろの部分が省略され、文末に不[pə? ʒ]あるいは“没 [mə? ʒ]”だけが残っている。そして、この形式がイントネーションによって疑問の機能を担うパターンよりは、ずっと頻繁に用いられる。)

(pp.150)

そして、山西省の「晋語」については、郭校珍(2008)において、次のように述べられている。

晋语没有与“吗”对应的语气词，与普通话“呢”“吧”对应的语气词分别是“勒”和“哇”，<省略—筆者>

(「晋語」には“吗”に対応する疑問小辞がなく、共通語である北京語の“呢”と“吧”に対応するのは、それぞれ「勒」と「哇」である)。

(pp.55)

以上紹介した4点の先行研究とも、「晋語」に“吗”のような疑問小辞がなく、その代わりに、正反型が用いられるという結論に達しており、3地点における筆者の調査の結果も同じである。ここまで一致していると、たとえ北京官話と隣接する一部の地域の「晋語」が、北京語に浸食されて、“吗”を持つに至ったにしても、「晋語区」の主要部の「晋語」では、疑問小辞の代わりに、正反疑問文が用いられるということが言えるであろう。

上に述べたように、張(2015)において、すでに中国の東南地域で話される6大方言のイエス・ノー疑問文において、正反型が用いられることを、先行研究を踏まえて論証している。それに加えて、今回、北京語が属する「官話区」と一番近い関係にある「晋語区」の方言でも、北京語と違って、「吗」のような疑問小辞を持たずに、正反型が用いられていることを指摘できたので、「イエス・ノー疑問文において正反型というパターンを用いることが、孤立語の類型的特徴である」という筆者の主張が改めて証明されたことになる。

ちなみに、北京語で「吗」のような疑問小辞がよく使われるからといって、北京語が属する「官話区」のすべての地域において、疑問小辞型が使われているとは限らない。注で示したように、「官話区」は、「东北官話」、「北京官話」、「冀魯官話」、「胶辽官話」、「中原官話」、「兰銀官話」、「江淮官話」「西南官話」という八つの区域に分けられる。この八つの地域のイエス・ノー疑問文のあり方の調査が待たれるわけである。

3-2 少なくとも「晋語」では、「VP+Neg」が「VP+Neg+VP」の省略形ではない

正反型疑問文は、「晋語」に限らずに、北京語が属する「官話区」でも、中国の東南地域で話される6大方言でも用いられている。北京語と中国の東南地域の一部の方言及び「晋語」の大きな違いは、正反型があるかどうかということではなく、正反型しかないか、それとも疑問小辞もあるかということである。

正反型の基本的なパターンは2つであり、「VP+Neg」と「VP+Neg+VP」のことである。この2つのパターンの関係について、先行研究の立場は真っ二つに分かれる。上に引用したところの邵敬敏・王鹏翔(2010)では、

它既像正反问，又像是非问，或者说，形式上类似于正反问句，只是正反问句的否定部分省去否定词后面的成分，只剩下一个“不[pə?ʒ]”或“没[mə?ʒ]”，……

(正反疑問文ともイエス・ノー疑問とも似ていて、正確に言うと、形式上は正反疑問文で、「VP+Neg+VP」という正反疑問文のNegの後ろの部分が省略され、文末に不[pə?ʒ]あるいは“没[mə?ʒ]”だけが残り、……)。

(pp.150)

と述べられ、即ち、「VP+Neg」が「VP+Neg+VP」の省略形だとみなされる。

一方、邢向东(2006)では、これに対して真っ向から反論する。邵敬敏・王鹏翔(2010)の

前身が雑誌論文としての邵敬敏・王鵬翔(2003)だったようで、その邵敬敏・王鵬翔(2003)を名指して反論し、

我们认为，陕北晋语反复问句的形式并不是经过省略形成的，句尾的“不”和“没”也仍然是否定词（陕西省北部の晋語の正反型である「VP+Neg」は、「VP+Neg+VP」の後部が省略されてできたものではない。文末の“不”と“没”は、文法化されることなく、依然として、否定辞である）。

(pp.259)

と述べられる。

邢向东(2006)の論拠には、中国語史関連のものと現代の「晋語」についてのものの2種類がある。中国語史関連の部分は、大変長いうえに、文献学的な中国語史が必ずしも現代の「晋語」に繋がるとは思わないので、省くこととし、以下現代の「晋語」に関するその上の叙述だけを引用する。

从实际的语言来看，邵文所举“一般能够补出 VP 或 VP 的一部分”的句子，在方言口语中大多是补不出来的，如“娃娃吃饱嘞没?”“今天进一回城不?”“妈妈叫他去不?”“你们出去吃不?”等,大都没有相应的“VP 不 VP”式。说它是后者省略的结果，也得不到事实的支持

(実際の言語データから見ても、邵敬敏・王鵬翔(2003)の言う「省略された VP あるいは VP の一部分を補うことができる」といったセンテンスに関して、実際は VP を補うことができない。例えば、“娃娃吃饱嘞没(子供は十分に食べた)?”“今天进一回城不(今日町に行く)?”“妈妈叫他去不(お母さんは彼を生かせるの)?”“你们出去吃不(君たち外で食べる)?”などのセンテンスは、「VP+Neg+VP」型にすることが不可能である。したがって、省略の結果と言われても、事実から支持されないのである)。

(pp.259)

この2説について、筆者は後者の非省略説に賛同する。そうする理由として、まず上述の邢向东(2006)が指摘した復元できないという現象があり、それから、次の3点をあげることができる。

(1) 省略だと主張する場合、その省略の動機は、音節を減らすことにあるとしか考えられなからう。表面的にみれば、確かに「VP+Neg+VP」と比べて、「VP+Neg」のほうが音節数が少ない。しかし、実は「VP+Neg」にはいろいろなバラエティがあり、曹志耘主编(2008)で「X」を使って表わしているように、「VP+Neg」における VP と Neg の間に「X」が入り、「VP+X+Neg」のようになることが多い。この X には「直後」というアスペクトを表わすものもあるが、文法的な意味が確認できず、ただ一音節の長さを保つたためのものではないかと思われるものまである。曹志耘主编(2008)では、「去(行く)」という動詞を使って、

このような正反型を考察し、北京語の「去不去」に対して、ウランチャブ市⁴については「去 X 不」と記述され、私の調査でも同じ結果を得ている。誰の目にも明らかなように、「去不去」も3音節であり、「去 X 不」も3音節である。この「去 X 不」が「去不去」の省略の結果だと言われても納得できないであろう。

もっとも、「去 X 不」は「去 X 不去」の省略形と見ることはできる。実際、私の調査した代県に関して、曹志耘主編(2008)では「去 X 不去」と記述されている。私の調査では、代県では、この「去 X 不去」も使われるものの、同時に「去不」、「去 X 不」、「去不去」の3パターンも使われる。そして、どうも「去不」という2音節のフレーズを使う場合は、2音節とも伸ばしながらゆっくり発音しているように感じられ、一方、「去 X 不」など3音節ないし4音節のフレーズを使う場合は、各音節とも相対的に短くなっていて、究極的なところ、短いフレーズを使っても、長いフレーズを使っても、全体の長さはそう変わらないのである。となれば、省略説はやはり支持されないであろう。

さらに言うと、本当に音節を一つでも削って省略したいという動機があるならば、そもそも北京語に「去吗」という2音節の形があるから、「去不去」という形は早くから淘汰されて当たり前であろう。しかし、そのようなことはなく、この「去不去」は依然としてたいへん元気な表現であり、今でも他の方言に大きな影響を及ぼしつつあるのである。一例をあげると、実際私が調査した第3地点である太原市に関しては、曹志耘主編(2008)でも私の調査でもほとんど「去不去」の一色である。これについては、郭校珍(2008)でも言っているように⁵、共通語である北京語の影響の結果なのである。

(2) 音節を減らすのが省略の目的ならば、省略は、品詞性に関係なく見られるものであろう。しかし、筆者が調査をしていて分かったことの一つは、「VP+Neg」と「VP+Neg+VP」とでは、VPの品詞性によって違う振る舞い方をするのである。具体的に言うと、共通語である北京語の影響を強く被った太原では、VPがどんな品詞であっても、「VP+Neg+VP」の一色のようなのだが、ウランチャブ市と代県では、動詞述語文は普通「VP+Neg」を使うが、名詞述語文では、「VP+Neg+VP」としかならないのである。つまり、「君は学生か」のような意味を表わす場合は、「你是学生不？」は使えなくて、「你是不是学生？」か「你是学生不是？」としか使えないのである。また、形容詞述語文に関しては、相手の感覚を聞くときには、「辣不？（辛いかな？）」「甜不？（甘いかな？）」のように、「VP+Neg」型がよく使われるが、一方、「お宅の新築のお家のリビングは広いかな？」のように、属性を訪ねるときには、「你家的客厅大不？」は言えなく、「你家的客厅大不大？」しか言わないという。

もっとも、ここでは、ひとまず品詞性に基づいて整理したが、実は品詞性が機能しているか、それとも、センテンスが長ければ、「VP+Neg+VP」が選ばれやすいかのどちらが本格的な理由なのか、現時点では分からない。だが、そのいずれが原因であっても、省略と

⁴ 曹志耘主編(2008)では、旧市名の「集宁」が使われている。

⁵ pp64

いう視点から説明できるような現象ではないと思われる。もし、後者のように、「VP+Neg」と「VP+Neg+VP」の選択が、それ以外のセンテンスの部分の長さに関連していれば、むしろ言語が近代になればなるほど複雑になってきたので、その過程で、「VP+Neg」から「VP+Neg+VP」が生まれたと解釈したほうが適切かもしれない。歴史的な文献に残っている言語が、たとえ「晋語」の直接的な祖先ではないのであっても、その歴史的な文献において、最初は「VP+Neg」しかなく、徐々に「VP+Neg+VP」が増えてきているという事実と関連させながら、「晋語」のことを考えたほうがよかろう。

(3)「正反型」の「VP+Neg」における Neg が文法化して疑問小辞になるには理由がある。

王力(1958)、太田辰夫(1958)及びその後の研究によって明らかにされているように、北京語の「吗」は、唐の時代の中国語の存在動詞である「有」の否定辞である「無」が、文法化してなったものである。この源流関係については、明らかにされたものの、そのような文法化の動機に関して、議論はあまりなされていない。

「吗」は最初は、「么」や「麼」と表記されていた。「么」や「麼」のような疑問小辞は唐の時代にすでに観察されているが、一方、東南地域の最南端の閩方言や北方地域の最北端の「晋語」において、現在に至っても疑問小辞がなく、正反型しか用いられていないことを見ると、文法化は、政治の中心地をはじめ、いわゆる交通などが便利な「中原地方」などで展開されたのであろう。

「吗」、「么」、「麼」なども、文法化する前の「無」も一音節であるとするれば、文法化の動機が省エネだと捉えることはできない。だとすると、仮説として、まず言語接触のことを思い付くであろう。唐の時代から、政治の中心地を常に膠着語を母語とする人たちが行き来している。金、元、清に至っては、そのような人たちが統治者となる王朝である。そのような人たちが中国語を使うようになるが、話し言葉としての中国語のセンテンスを構成する個々の単語の意味を吟味しているとは考えられない。現に上で指摘した「VP+X+Neg」における X のように、意味を特定できない要素もセンテンスに入っているから、一々吟味してもうまく行かなかったであろう。そのために。彼らは、文末に来ている否定辞の「無」を、彼らの母語にある疑問小辞としてとらえ、そのつもりで中国語を使ったのであろう。これが、「無」の文法化の一因として想像しても、必ずしも無茶なことではなかろう。

一方、今回の筆者の調査を通して、「正反型」の「VP+Neg」では作りにくい構文を何種類かを見つけたので、このような「正反型」の不備も文法化の発酵剤として機能したのではないかと考えたい。

そのような作りにくい構文の一つは、日本語の「も」のように同類という文法的概念を表す「也」を用いた「主語指向“也”構文」である。意味的には「君も行きますか」のようなもので、「吗」のような疑問小辞構文を使えば、次の例(3)のように、的確なセンテ

スが成立する。

(3) 你也去吗?

一方、次の例(4)のように、正反型では、非文法的になってしまう。

(4) *你也(去不/去不去)?

この種の意味を代県の晋語で言えば、次の例(5)か例(6)になる。例(5)はイントネーションによる疑問文であり、例(6)は結局一種の疑問小辞型疑問文になってしまう。

(5) 你也去?

(6) 你也去 lo?

厳密に言えば、例(6)の疑問小辞である[lo]は確認要求を表すものであり、中立型疑問を担うものではない。そのために、調査でその姿をとらえたが、基本的な機能が中立型疑問を担うイエス・ノー疑問文の検討に加えてこなかった。しかし、「正反型」の「VP+Neg」では「主語指向“也”構文」を作れないという現在の論点の証拠には使えるであろう。

「も」も「也」も主語に対して使った場合、出来事の主体としての主語の属性にある種の限定を加えたことになる。この立場から検討してみたところ、出来事の主体としての主語の属性に別種の限定を加える形式が用いられる構文にも、正反型は機能しないようである。例えば、「一人で来るか」のような傾きを持つ疑問文を「晋語」に訳せば、やはり次の正反型の例(7)は文法的ではなく、普通例(8)のようなイントネーション型か、例(9)のような確認を表す疑問小辞型が使われるのである。

(7) *就你一个人来不?

(8) 就你一个人来?

(9) 就你一个人来 lo?

「VP+Neg」だけではなくて、「VP+X+Neg」を使った以下の例(10)も同じである。

(10) *就你一个人来不来?

もっとも、例(10)が「一人となった場合、来るか」という意味ならば、文法的になる。しかし、それはまったく違う話になってしまう。

研究を深めていけば、正反型で作れない疑問文がもっといろいろと出てくるかもしれない。このように、正反型では作れない疑問文の構文がある以上、このことが正反型とは違う構文の生起する動機となる可能性はあるであろう。

4 まとめ

本稿では、まず次の(1)のような結論を出し、もって、「イエス・ノー疑問文において正反型というパターンを用いることが、孤立語の類型的特徴である」という筆者の主張の正しさを改めて証明した。

(1)少なくとも「晋語区」の主要部の「晋語」においては、イエス・ノー疑問文の構文パターンとして、「吗」のような疑問小辞ではなく、「正反型」が用いられる。

続いて、本稿では、以下の(2)のような主張が適切であることを検証した。主張は先行研究で打ち出されたものだが、その正しさを証明するのに、本稿では従来にはあまりみられない証拠を用いた。

(2)少なくとも「晋语」においては、「正反型」の「VP+Neg」は、「VP+Neg+VP」の省略形とは言えず、むしろ「VP+Neg」のほうがより典型的なものである。

最後に、「晋语」のデータを使ったものの、むしろ「晋语」ではないほかの地域の中国語における「吗」の成立に言及し、Negが文法化して疑問小辞になるその動機について、検討してみた。その重要な一つが「「正反型」では一部の疑問表現が成り立ちにくい」という構文的理由ではないかと試論した。

参考文献：

- 太田辰夫(1958)『中国語歴史文法』江南書院。後、太田辰夫(2013)『中国語歴史文法 新装再版』朋友書店
- 張麟声(2015)「中国語のイエス・ノー疑問文の構文パターンについて」『日中言語研究と日本語教育』8: 24-37
- リンゼイ J. ウェイリー著、大堀壽夫・古賀裕章・山泉実訳(2006)『言語類型論入門 言語の普遍性と多様性』岩波書店
- 曹志耘主编(2008)『汉语方言地图集 语法篇』商务印书馆
- 郭校珍(2008)『山西晋语语法专题研究』华东师范大学出版社
- 袁家骅編(1960)『汉语方言概要』北京文字改革出版社
- 袁家骅編(1983)『汉语方言概要 第二版』语文出版社
- 邵敬敏・王鹏翔(2003)「陕北方言的正反是非问句——一个类型学的过渡格式研究」『方言』(1)40-48
- 邵敬敏・王鹏翔(2010)「陕北方言的正反是非问句」邵敬敏等著(2010)『汉语方言疑问范畴比较研究』暨南大学出版社
- 邵敬敏等著(2010)『汉语方言疑问范畴比较研究』暨南大学出版社
- 王力(1958)《汉语史稿》(北京大学汉语史教材)。王力(1980)《汉语史稿 修订本》中华书局
- 邢向东・张永胜著(1997)『内蒙古西部方言语法』内蒙古人民出版社
- 邢向东(2006)『陕北晋语语法比较研究』商务印书馆
- 中国社会科学院・澳大利亚人文科学院合作编纂(1988)『中国语言地图集』香港朗文(远东)有限公司

Whaley, Lindsay J. 1997. *Introduction to Typology : The Unity and Diversity of Language*. California: Sage Publications

本稿は金水敏教授がプロジェクトリーダーを務める国立国語研究所の「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」という共同研究プロジェクトの研究成果の一部である。記して感謝の意を表したい。